特集 “輝くOB・OG 第6弾 インタビュー”

本学卒業生の古田正美さんは、全国最多約1,200種類の飼育種を誇る鳥羽水族館の前館長で、スナメリ研究の第一人者です。そんな古田さんにインタビューしてきました。

（三重県鳥羽市鳥羽水族館）

鳥羽水族館前館長が語る。“一生懸命学び、楽しむ” File.27

鳥羽水族館　前館長

古田 正美
Furuta, Masami

1948年三重県生まれ。1968年三重県立大学水産学部（現生物資源学部）入学。卒業後、鳥羽水族館に就職し、スナメリやジュゴンの飼育員を経て、2005年～2013年、鳥羽水族館長を務める。著書：『いたずラッコのチャチャ』（学研）など多数。

セイウチのボッちゃんと

学生時代～教育実習

ロシア連邦領ベーリング島～クジラの骨の前で

「スナメリ飼育50周年記念国際シンポジウム」での講演（2013.8.21-22）

長髪をなびかせて～楽しんだ学生時代

当時の大学の雰囲気はいかがでしたか？

古田さん：70年代の安保闘争で学生運動が激化していく時代でした。私は自動車部で仲間と車を改造したり、自治会の書記に抜擢されデモを指揮したり…。かなり活発な学生で、何かあると「古田」の名前が教授会で挙がっていたようです。

やんちゃな学生さんだったんですね。

古田さん：先生も「古田を自由にさせておくと、何をするか分からない」とでも思ったのでしょうか。2年生の冬に自動車部の顧問に呼ばれて、卒業するまで毎日、研究室で日照データを管理するお役目をいただきました。雨の日も風の日も、体調の悪い時も休まず頑張りました。厳しい研究室でしたが、その分、学ぶことも多く貴重な経験でした。

大学生活で、古田さんが身に付けたことはなんですか？

古田さん：辛抱を覚えました。そして、目の前にある仕事にしても、遊びにしても100％楽しむこと、これは私の人生の流儀になっています。

いたずラッコのチャチャとの出会い

水族館の飼育員というと憧れの職業の一つだと思いますが、古田さんにとっても若い頃からの夢だったのでしょうか？

古田さん：それが全然。私自身は研究生として大学に残ろうと考えていたのに、先生の紹介で鳥羽水族館の面接を受けることになって。そのまま鳥羽水族館に42年務めました。学生時代に研究室で見ていたホルマリン漬けの魚と本物は違うので、入社して1年間は水槽の前で必死に名前を覚え直したものです。

鳥羽水族館での思い出を教えてください。

古田さん：飼育下でのスナメリの出産に世界で初めて成功したこと、オーストラリアの木曜島・金曜島でのジュゴンの調査※1、シーラカンス調査の時に訪れたコモロ・イスラム連邦共和国※2でクーデターに遭遇し、51時間かけてモザンビーク海峡をわたって逃げたこと、思い出は数えきれないけど、その中でも特にラッコの飼育は印象深いですね。当時、日本では飼育の成功例がなく責任の重い仕事でしたが、1983年10月3日にアラスカの海から4頭を迎え入れて、翌年に子どもが産まれた時には鳥羽水族館の来訪者が一気に100万人も増え、お客さんが鳥羽駅まで（約750m）行列を成したほどでした。

ラッコへの給餌

著書にラッコの絵本がありますね。

古田さん：『いたずラッコのチャチャ』は、アラスカから来た「プック」の子どものことを書いた絵本です。ある朝、自宅に「プックが子どもを産んだ!」と緊急連絡が入り、慌てて水族館に向かうとプックが毛玉のようなものをお腹の上に抱いている。その毛玉のように小さかった赤ちゃんが、日本で初めて産まれたラッコの子どもで絵本の主人公の「チャチャ」なんです。

きっと我が子のように可愛かったでしょうね。

古田さん：親子の様子を58日間、水槽の前で寝る間を惜しんで観察を続けました。市の獣医師（家畜専門）と「犬ならどうするだろう?」と対応策を練ったり、自分の腕を噛ませている間に注射をしたり…。噛み跡、今も残っていますよ。全てが試行錯誤と粘りの日々でした。学生時代に培った辛抱強さが生きたのだと思います。

これから…

館長を2013年に退任され、顧問としてのお仕事も終えた今、どのようなことをされていますか？

古田さん：もちろん研究は続けています。今は三重大学との共同研究で、スナメリの生態調査（生物資源学部 吉岡 基教授と）、ウシモツゴ※3の保全調査（同学部 河村功一准教授と）など。プライベートでは、自宅の庭で昆虫を探したり、双眼鏡で野鳥観察していますよ。職業病だね（笑）。

今後、三重大学と鳥羽水族館の連携の中でどのようなことを期待されますか？

古田さん：鳥羽水族館は、カピバラやビーバーなどの陸水動物の飼育も進めています。海と陸の貴重な動物が集まった“宝の山”です。是非、大学には教育・研究の場として大いに活用してもらいたい。一緒になって発展していけばよいと思っています。

最後に、若い人たちへアドバイスをお願いします。

古田さん：僕の人生では、ピンチの時には世界中の友人たちが助けてくれました。皆さんも、人との出会いを大切にしてください。そして、いつでもどんな時も“楽しむ”気持ちを忘れないでください。

※1：鳥羽水族館の人気者「セレナ」は、1986年にフィリピンのパラワン島エルニドで保護されたジュゴンの幼獣。
※2：インド洋に位置する独立国家で、現在のコモロ連合。
※3：絶滅危惧種に指定されているコイ科の淡水魚。

今年の夏、鳥羽水族館では3頭のスナメリの出産が続きました。親子の観察や人工哺育のお手伝いをするため、生物資源学部の学生がボランティアとして活躍しています

赤ちゃんの成長を記録、観察

プールでの遊び相手

すくすく成長中!

ボランティアを通して…

左／千藤 咲さん（2年）、右／権藤恒希さん（1年）

水族生物により興味が湧きました。（権藤さん）

鯨類について、もっと深く知りたくなりました。（千藤さん）

古田前館長とのスリーショット